

11月4日(土) 研究発表4 第4室 (203)

通訳技術と英語教授法：動機付けと学習効果

Interpreting Techniques, Motivation, and English Acquisition

札幌国際大学

齋藤彩子

1. はじめに

英語を実務的な言語として認識し、英語の学習に新たな関心を持ち始める学生が増えている。その理由の一つにインターネットやEメールの普及がある。学生はそれらを使って海外と直接コミュニケーションを取り、その過程で今まで抽象的な観念でしか捉えることのなかった外国を実感し、同時に英語が生きた言語であるとの認識も持つようになってきた。手ごろな価格で海外旅行ができることも、もう一つの理由として指摘したい。学生は海外へ出て、英語を聞き話す能力の重要性を痛感して帰ってくる。このように情報化、国際化が身近に進む中、英語の教育方法は厳しく試される時代になっている。

2. 研究の目的

通訳は一つの言語で表現されたことを別の言語に言い直す行為であり、一見単純に受け止められがちである。しかしその工程は幾段階もあり、集中力、技術力を必要とする。まず音声のある一定のまとまりを持つ表現として捉え、内容を正確に理解したうえで、別の言語に翻訳し、音声で産出するのであるが、話し手が話す量は、短文が一つということとはめったにない。複数の文を通訳は聞き、記憶し、その順番どおりに別の言語に産出するのが通訳の仕事である。この工程は通訳特有のものとみなされがちであるが、外国語の習得が不完全な話者がその外国語を使う場合、脳内の工程は通訳が行う脳内処理とよく似ている。本研究はこの点に注目し、英語の総合コミュニケーション能力開発に通訳訓練法を取り入れ、その効果を考察してみたい。

3. 研究の仮説

1. 通訳訓練の一つであるプロソディー（韻律）、シャドーイングを繰り返すことにより、英語特有のリズム、イントネーション、発音に慣れ、英語の聴解力、読解力が向上し、音声産出を行うことにも慣れる。
2. シャドーイングの訓練により、先読み、論理の方向性を速やかに把握できるようになり、読解力、聴解力が向上する。また音声で行うため、紙に書いて視覚で覚える場合とは異なる記憶方法の習得が可能となる。
3. 単語の連続訳を行うことにより、単語の意味把握と記憶力、語彙の増加が可能に

- なり、表現力が向上する。
4. 英文、日本語のサイトトランスレーションは、語句をまとめた意味で捉える訓練となり、文章理解が容易となり、読む速度も上がる。
 5. 英文のディクテーションは、音声認識と意味把握、文章構造習得の訓練となり、読解力、聴解力が向上する。
 6. 日本語から英語への転換を即時に行う訓練を行うことにより、英語表現力が向上する。
 7. プロソディーやシャドーイングなどの音声表現訓練、ディクテーションやサイトトランスレーションは学習者が積極的に関わることを要求される学習法であり、授業態度を受動的なものから能動的に変えることが可能であり、その分学生の練習量が増え、英語力強化につながる。

4. 研究方法

1. 教科書「*Developing Interpreting Skills for Communication* と付属テープ」(皆川治恵、R. G. Potter、筆者共著、1999年、南雲堂)を使い、実技訓練を中心に授業を行う。対象は本学2年次の総合英語表現法クラス35名
2. 学期始めと終わりに習熟度テストを、リスニング、文法、語彙、リーディングで行い、結果の比較を行う。
3. アンケート調査も行い、各訓練の難易度を学期始めと終わりに見る。
4. 対象群は同年次同科目受講者35名で、通訳訓練は受けない。

5. 考察と結論

通訳技術の訓練を授業に取り入れた結果、研究の仮説全項目において統計的な有意差が生じた。個々の学生に関しては有意差が見られなかった学生もあるが、欠席や宿題を忘れるなど実技訓練を怠った学生であり、その効果が薄れたと考える。対象群との比較においても、語彙、文法において被験者グループはより大きな改善が見られた。

通訳訓練は、音を聞き、理解し、脳内で英語または日本語に転換し、それを適切な音声で産出するという複数の異なる行為を同時に行う訓練である。英語教育を主に英日の翻訳で受けてきた学生は、始めは難しく感じる学習法ではあるが、目新しい学習法であること、テープで自分の英語を聞き、発音、イントネーション等のチェックが出来、学習効果が比較的容易に自己診断できることなどにより、学生に対して学習の動機付けが可能となったと考察する。

「読み書き」も含む英語による総合コミュニケーション能力は、英語のみで理解し、考え、応答することが最終目標である。従って、日本語が介在する通訳訓練方法は、通訳に関心が薄い学生には、長くとも1年間で十分であり、それ以後は英語中心の学習が望ましい。